



岐阜の夏と言えば、長良川の花火。戦後間もなく始まったという伝統ある大会に、今年も全国から選りすぐりの花火師が集まり、すてきな夜を演出してくれました。市内唯一の花火会社「村瀬煙火」の若手花火師丹羽俊介さんも、その一人。シーズンを控え忙しい7月半ばに福光東の事務所を訪ね、花火にかける思いを語っていただきました。

## 器用さを生かしたくて

小学校から高校1年までは野球に打ち込んでいました。もともと器用な方だったので、打順も二番でした。将来のことを考えるようになったのは、大学に入ってから。スーツを着て会社勤めをするより器用さを生かして伝統工芸の職人になりたいと、ふと頭に浮かんだのが「花火師」だったのです。そこで、大学3年のとき、花火師になるために必要な「火薬類取扱保安責任者」の国家試験を受け、資格を取りました。ところが、花火会社の求人というのはめったにありません。「村瀬煙火」でも募集はなかったのですが、ダメでもとものつもりで自分からアタックしたところ、幸運にも採用していただけたのです。



長良川の河原で仕込みをする丹羽さん

## 一瞬の輝きのために

1回の花火を上げるために、最低2~3週間、山の中の工場にこもって一人でひたすら作業をします。孤独な仕事ですが、自分には合っています。ほんの一瞬の輝きのために、見えないところでとても長い時間をかける、それが花火師の仕事です。本番でのお客さんの歓声や拍手には、いつも励まされます。現場では耳栓をしていますが、お客さんの雰囲気はちゃんと伝わってくるのです。

## いつも苦心の連続

花火にはきまった設計図があるわけではなく、お客さんからの見え方をイメージしながら、頭の中の自分なりの設計図に沿って作ります。打ち上げ中に、自分の花火をゆっくり眺める余裕はありませんが、出来不出来はすぐにわかります。納得いく色や形はなかなか出せず、どうすればよくなるのか、いつも苦心しています。それだけに、うまくいったときは、何ともいえない満足感があります。

## これからの夢

納得のいく花火をとことん追求したいと思っています。めざしているのは、消え口がそろった、形のいい花火。いろいろな新しい形の花火を作りたい。特に、丸くない花火というのは難しいのですが、いつか、長良川で四角い花火を上げてみたいです。

## 丹羽さんから みんなへのメッセージ

新しいことにチャレンジしよう。若いうちにいろんな経験を積んで、視野を広げることがいつか役に立つ！



ロケーションの美しさと、金華山に反響して鳴り響く大きな音。これは、全国に自慢できる、長良川の花火大会ならではの魅力なんだよ。



丹羽さんの言葉一つ一つに、職人としての強い思い入れを感じました。夜空の花は、花火師たちのこんな熱い思いが咲かせているのです。

## 丹羽俊介 プロフィール

1980年、各務原市生まれ。地元の小中学校を卒業後、長良高校へ進学。その後大学で土木を学びながら花火師に必要な資格をとる。卒業と同時に、「村瀬煙火」へ入社。長良川の花火大会をはじめ、全国の花火大会や競技会で腕を磨いている。好きなスポーツは野球。趣味はバイク。